

私は、中学校の国語教員をしていた。ある教科書会社の中学校国語の教科書に、中島みゆきさんの作品が載っていたことがある。それも中学3年生の最初の教材としてである。この教科書を採用している地域の中学生は、3年生になると、中島みゆきさんの作品から国語の学習をスタートさせることになる。その作品は『永久欠番』である。

どんな立場の人であろうと
いつかはこの世におさらばをする
たしかに順序にルールはあるけど
ルールには必ず反則もある

街は回ってゆく 人1人消えた日も
何も変わる様子もなく 忙しく忙しく先へと

100年前も 100年後も
私がないことでは同じ
同じことなのに
生きていたことが帳消しになるかと思えば淋しい

街は回ってゆく 人1人消えた日も
何も変わる様子もなく 忙しく忙しく先へと
かけがえのないものなどいないと風は吹く

愛した人の席がからっぽになった朝
もうだれも座らせないと
人は誓ったはず
でも その思い出を知らぬ他人が平気で座ってしまうもの

どんな記念碑（メモリアル）も 雨風にけずられて崩れ
人は忘れられて 代わりなどいくらでもあるだろう
だれが思い出すだろうか
ここに生きてた私を

100億の人々が
忘れても 見捨てても
宇宙（そら）の掌の中
人は永久欠番
宇宙の掌の中
人は永久欠番

以前から中島みゆきさんの言葉の選び方、言葉に対する感覚に興味があった。先日たまたまその理由がわかった。中島さんは、幼少期の頃から母親に「刀で切った傷は薬をつければ治るけど、言葉で切った傷は薬では治せないんだよ」と教えられてきたそうである。これが、彼女の言葉への向き合い方を決定づけたのである。一人の天才が世に出た陰には母親の教えがあったのである。

皆さんが国語の先生だったら、この『永久欠番』を使って中学3年生を前にしてどんな授業をするだろうか。梁川高校の3年生と一緒に『永久欠番』について考えてみるのもおもしろい。